

カーソン・マッカラーズの『悲しき酒場の バラード』における愛と運命

倉 本 護

I 町と囚人

この論文では、*The Ballad of the Sad Café*¹⁾に見られるギリシア悲劇的構成を想起させる模擬的形式について考察し、そこに展開する「愛する者」と「愛される者」との皮肉な関係、特に三角関係によって示される愛の姿を分析し、過酷な運命のいたずらから生ずる人間存在のはかなさ、切なさに言及したい。

まずこの *The Ballad* では、南部の“dreary”で、“lonesome”で、“sad”な町、しかも「この世のあらゆる他の場所から遠く離れ、孤立した場所のような」(7) 町が物語の舞台となっている。

その舞台の中心にあるのがアメリカのかつての酒場である。だが語り手によれば、今はその建物は板囲いでふさがれていて、午後おそく、時折板張りのない窓から「夢の中でほんやりと現れる恐ろしい顔のような——しかも男か女かわからない青白い顔」が町を見下ろすのである。町には「紡績工場と行員の住む二間の住宅群、数本の桃の木、スタンドグラスの窓が二つある教会が一つ、それにみすばらしい本通りがある。」(7) *The Ballad* の主要な出来事はすべてアメリカの酒場の内部と周辺であり、劇場の舞台

1) テキストは Carson McCullers, *The Ballad of the Sad Café* (New York: Penguin Books, 1963) 以下この作品については *The Ballad* と略記し、この本からの引用は本文中にその頁数のみ記す。

のような限られた場面設定が感じられる。

語り手は八月の午後の大通りの味気なさを語り、紡績工場の工具たちの無聊さについて次のようにいう。

These August afternoons — when your shift is finished there is absolutely nothing to do; you might as well walk down to the Forks Falls Road and listen to the chain gang. (8)

ここで“chain gang”とはまず何を意味するのだろうか。物語の語り手によれば、“chain gang”は「十二人からなり、全員が黒と白の縞の囚人服を着ていて、足首は鎖で繋がれている。」(84) 彼らは夜明けと共に護送車で運ばれてきて、夕暮れまで作業する。その輪唱するような歌声は「大地そのものから、あるいは大空から」聞こえてくるように見える。この鎖に繋がれた囚人は黒人七人、白人五人の構成であるが、彼らは物語の冒頭部分と最後に登場し、「その歌声に耳を傾ける者は歓喜と恐怖でぞっと寒気を覚える」(85) のだが、この小説全体の雰囲気象徴的に表現している。換言すれば、彼らはある閉ざされた南部の小さな町全体の姿の象徴であり、ここでは人々は人間的な尊厳のない、汲々とした退屈な生活を送っているのである。この囚人の合唱は物語の冒頭部分に登場する男とも女ともわからない、一人の斜視の女の喜びと悲しみにみちた人生の旋律をも伝えている。Suzanne Morrow Paulsonによれば、“Chain gang”は“a destructive force in an American society grounded in misogyny and the acceptance, indeed the celebration, of homo-social groups, masculine aggression, and criminality”²⁾を表している。そしてこの囚人たちが悲しげに歌う合唱の内容はたとえ読者にはわからないとしても、グループとして描かれる姿はギリシア悲

2) Suzanne Morrow Paulson, Carson McCullers's *The Ballad of the Sad Café: A Song Half Sung, Misogyny, and "Ganging Up."* *Critical Essays on Carson McCullers*, ed. Beverly Lyon Clark and Melvin J. Friedman (New York: G.K. Hall & Co., 1996) p. 189. Oliver Evans は *Carson McCullers: Her Life and Work* (London: Peter Owen, 1965) p. 133 で「十二人の男は全人類を表し、彼らは精神的な孤立の運命から逃れられないゆえに囚われ人である。」と語っている。

劇におけるコロス(合唱隊)的形式の模倣といえよう。³⁾ そして囚人といっている状態にあるこの町の人々はこの物語のさまざまな事件の展開の中で、Margaret B. McDowell の指摘するように、「漠然とした悪意をもつ集団やいわば不吉な合唱隊となり」アメリアの行動について批評するのである。⁴⁾

II ライモンの登場と酒場の役割

物語の語り手は、かつては繁盛したが、今は見る影もなく零落したアメリアの現状を語り、アメリアのことはマーヴィン・メーシーとの「危険な結婚」やライモンによる酒場の繁盛ぶり、そしてその後の悲劇により人々の記憶に刻まれていることを述べ、読者の好奇心をそそる。こうして物語は寂びれた町の現在から過去へと時間をさかのぼることになる。

退屈きわまりない町の人々は土曜日の夕方、家庭の息苦しさを逃れて、アメリアの酒場へやって来る。だがそこは最初から酒場だったのではなく、アメリアが父親から受継いだもので、「主として飼料や肥料、それに穀物や嗅ぎ煙草といった日常食品を売る店」(8) だった。ミス・アメリアは近隣で一番の金持ちであるが、そんなアメリアについて語り手は次のようにいう。

... the only use that Miss Amelia had for other people was to make money out of them. And in this she succeeded. Mortgages on crops and property, a sawmill, money in the bank — (9)

語り手はアメリアの有能さと異質ぶりを語る。マッカラーズの描く主人公アメリアは、伝統的な女性像への挑戦であり、当時の世間常識とはかけ離れた男性優位社会に忍従しない自立的な存在であるといえる。Sandra M. Gilbert と Susan Gubar が指摘するように、アメリアは “the kind of physical

3) ギリシア悲劇に関する資料としては、今道朋信訳「詩学」『アリストテレス全集 17』東京: 岩波書店、1972。鷲山第三郎著『悲劇と神の問題』東京: 福村書店、1955。川島重成著『ギリシャ悲劇の人間理解』東京: 新地書房、1988を参考とした。

4) Margaret B. McDowell, *Carson McCullers* (Boston: Twayne Publishers, 1980) p. 67.

power, intellectual authority, and personal autonomy”をもっている。⁵⁾ アマゾネスのようなアメリカは筋肉逞しく、ドレスよりもオーバーオール姿を好むような活動的な女性であり、自らを実験台として薬を作り、無料で民間療法を施して病人を治す。だが訴訟好きといった欠点があり国会議員のような金持ちにはなれない。また「こうした裁判沙汰をのぞけば、彼女はいつも変わらぬ生活を送り、毎日がその前の日とたいして変わらなかった」(9)のである。ところが、アメリカが三十の春に運命の大転換がやって来る。それは彼女の運命を根底から変えることになるライモンの登場である。年齢も不祥で、得体の知れぬ彼は幸福の使者の装いをしたエリニユス(復讐の女神)的存在だといえる。何故か。その原因は彼女のヒュプリス(越権行為)である。それではギリシア悲劇的視点から見るこの物語でのアメリカのヒュプリスとは何か。この場合、それは当時の男性中心的社会通念の否定である。アメリカは「無気力な町の人々」の社会からはみ出した存在であり、町の秩序を乱していることになる。Louise Westling はアメリカの“transgression of conventional sexual boundaries”を指摘し、それゆえに男の報復を受けるといっている。⁶⁾ 同様な指摘は Sandra M. Gilbert と Susan Gubar にも見られる。⁷⁾ また彼女の結婚も「この地方ではかつて結ばれた他の結婚とは異なっていた。」(9)のである。

要するに、彼女は社会規範を破ったことになる。その結果がエリニユスの役割を担ったライモンの出現と考えたい。

ここでカーソン・マッカーズがこの作品でどのようにライモンを描いているか見てみたい。まず、ライモンは、アメリカの腰くらいの背丈しかないせむしの男である。しかも、町の人でもアメリカにも彼の年齢は謎である。(: he had no idea how long he had been on the earth, whether for ten

5) Sandra M. Gilbert and Susan Gubar, “Fighting for Life.” *Critical Essays on Carson McCullers*. p. 148.

6) Louise Westling, “Tomboys and Revolting Femininity.” *Critical Essays on Carson McCullers*. p. 159.

7) “Fighting for Life.” p. 148. ここでは作者が傲慢にも“no man’s land”で生きられると考えた一人の女に与えられる罰を劇的に描いていると述べている。

years or a hundred! So his age remained a puzzle.) (76) Sandra M. Gilbert と Susan Gubar はライモンについて次のようにいっている。

“Rather, pale and vampiric, he is in Freudian terms the (false) baby as false phallus, whose deformity and fake masculinity represent the deformity and fakery that (as Miss Amelia must learn) are associated with her own self-deluding male impersonation.”⁸⁾

ここで再び、アメリカとライモンの出会いに話を戻せば、彼女を訪れた見知らぬせむしの男はアメリカのいとこと名乗り、ぼろ着やがらくたの詰まったスーツケースから一枚の古ぼけた写真を取り出す。「そこに写っている顔はちっちゃくて白っぽくほやけ、誰のアルバムにもある古ぼけた写真とってよかった。」(13) その場に居合わせた町の者、たとえばスタンピー・マックフェイルはアメリカがこの新参者に玄關払いを食わせると思って居たたまれない。ところが、ここで前代未聞のことが起こる。アメリカが店の中に入って夕食の残りが台所にあるから食べたらいよいよというのだ。語り手によれば、“Only a few times in her life had Miss Amelia invited anyone to eat with her, unless she were planning to trick them in some way, or make money out of them.” (16) なのである。その夜、ベランダにいた男たちは“there was something wrong.”とを感じる。さらに、アメリカが店の二階の部屋へと“a dirty little hunchbacked stranger, come from God knows where”を案内するという“異常な”行動にまで発展する。次の日スーツケースにある物が欲しさにアメリカがよそ者を殺したというマリー・ライアンの無責任な発言に端を発し、その日、町中の者がでっち上げたのは、“a fierce and sickly tale” (19) なのだ。そしてその翌日、「数人の分別ある人」と「三人の善良な人々」を除けば、町の人々はお祭り騒ぎをする。町の人々のこのお祭り騒ぎ心理の背景には、“退屈で心が腐る”ような空虚な生活があるのはいうまでもない。何か事件を期待して「ポーチにいた町の代表団」は二階から「足元の床板の一枚一枚が自分のものだと

8) Ibid., p. 150.

いわんばかりの尊大な態度で」(24) 現れるライモン・ウィリスの登場で肩すかしを食う。この *The Ballad* では、町の人々はグループとして描写されている点に注目したい。例えば、アメリアが赤いハンカチで頬を拭く動作をきっかけにして「ポーチにいる町の代表団」が店の中に入る場面は次のように描かれている。

All at once, as though moved by one will, they walked into the store. At that moment the eight men looked very much alike — all wearing blue overalls, most of them with whitish hair, all pale of face, and all with a set, dreaming look in the eye. What they would have done next no one knows. (23) (下線部は筆者による)

また、ポーチにいた同じ集団については次のような記述もある。

They themselves did not know what they were waiting for, but it was this: in times of tension, when some great action is impending, men gather and wait in this way. And after a time there will come a moment when all together they will act in unison, not from thought or from the will of any one man, but as though their instincts had merged together so that the decision belongs to no single one of them, but to the group as a whole. (21)

この上記の二つの引用で問題にしたいのは、彼らの無意識的な、同時的集団行動である。そして語り手はこの集団についての二番目の引用に続く部分において、更に個人の意志ではどうにもならない群集心理によって、その場の問題が平和的に解決するか、「略奪や暴力や犯罪」といった結末となるかは“destiny”次第であるといっている点は重要である。いうまでもなく、これがアメリアを取り巻く環境である。盲目的群集心理の恐ろしさが強調されるが、ここで特に注目したいのは、マッカラーズが、“joint action”の結果を左右するのは“destiny”であるとしている点にある。そこでまず“destiny”の項を調べるならば、*The Century Dictionary Volume II*⁹⁾ は次

9) *The Century Dictionary: An Encyclopedic Lexicon of the English Language*. 1980 rev. ed.

のように定義する。

1. An irresistible tendency of certain events to come about by force of predetermination, whatever efforts may be made to prevent them; overruling necessity; fate.

2. That which is predetermined and sure to come true.

3. That which is to become of any person or thing in the future; fortune; lot; luck: often in the plural.

4. [cap] pl. In classical myth., the Fates or Parcae; the powers supposed to preside over human life.

つまり、この項の各定義を見てもわかるように、マッカラーズは、“destiny”という言葉を用いることで、集団行動の背後に個々の人間の行動を含めてだが、その行動を左右する不思議な、運命的な力の存在を暗示しようとしているということである。“destiny”をこの意味で考えるとき、一番目の引用にある待っていた「八人」が“all with a set, dreaming look in the eye”という表現が運命的な力の作用を受けている状態を示していることがわかる。そして後述することになるマーヴィンとアメリカとの対決の場面でも、“dreaming”という言葉を用いられていることをこの時点では指摘しておきたい。

この作品では少数の善良な人々を除けば、アメリカの周囲の人々は、これは一般世間を象徴するように描かれているが、アメリカのその男性を凌ぐ社会的活躍ぶりには否定的である。*The Ballad*における他の女性描写についていえば、アメリカだけが個性的に描かれ、メアリー・ヘイルを例外として他の女性は名前もない、影のような集団として描かれ、アメリカ対男性中心社会といった軋轢の構図を浮き彫りにしている。

この社会的に孤立したアメリカは、前述したようにライモンに出会った瞬間から、見えない運命の力によって世間の目から見れば不釣り合いな“同棲生活”を享受する。彼女の店はライモンが店へ登場した日から酒場へと変わる。そしてライモンの不思議な魅力と社交性によって、酒場は人々に

とって「この辺で唯一の楽しみを与えてくれる場」(31)となり、「これまでこの地方では知られなかったいわば自尊心」(65)を取り戻せる場所となる。愛する喜びを知った彼女は別人のようになり、人々に対して優しくなる。「猛烈な訴訟騒ぎを起こすのが好きなのは変わらなかったが、前ほど仲間をだましたり、冷酷な取り立て方をしなくなっていた」(31)し、社交好きのライモンのせいで、伝道集会や葬式にも参列するようになる。しかし、こうしたアメリカの変化は人からは“mysterious”でしかない愛の奇跡である。歳月が経つにつれ、酒場は繁盛し、大きくなる。ここで注目したいのは、愛がアメリカ個人を退屈で心の腐る日常から救い上げただけでなく、町の人々にも同じ生活の喜び、人間らしさを与えている点である。語り手によれば、この町では、日曜日の「一日ががかりのキャンプ集会」は“a pleasure”ではあったが、「地獄のイメージを強烈に植えつけ、神に対する強い恐怖心を刻み込むため」(29)のものなのである。

それゆえに、語り手は教会よりもアメリカの酒場の役割を重視している。その日暮らして、“the cheapness of human life”を身に染みて感じている人々にとっては、カルヴィニスティックな神についての説教よりも、アメリカの魂を暖めてくれる酒が人と人との和を与えてくれたのである。ライモンを愛することによって、アメリカは自らが救われただけでなく、他者への愛、つまり夜の闇を恐れるライモンへの優しいいたわりから遅くまで開く酒場は、アメリカの酒場の繁栄につながり、町の人々をも救うのである。マッカラーズは *The Ballad* の中で繰り返えされる愛の人間ドラマを通じて、愛の力が如何に人の心を豊かにするか、社会を明るくするか、また愛のない世界が如何に人を醜く歪め、「人間の尊厳」を奪うものであるか、その結果社会が如何に蝕まれ、空しいものになるかを語ろうとしている。

III 愛と運命の明暗

アメリカの六年続いた幸せは、前夫マーヴィン・メシーの出所と帰還で崩れるが、この物語の核心部分である「愛する者」と「愛される者」に

ついて考察するまえに、この章では前夫マーヴィン・メーシーについて考えたい。彼は“the handsomest man in this region” (34) であるだけでなく、「筋骨逞しく」、「裕福で、いい給料を取っていた。」しかも彼は“the beloved of many females in this region” (35) であり、悪党で若い娘たちを「墮落させ、辱めた」のである。だが作者は安易にマーヴィンに悪党の烙印を押そうとはしない。それどころか、マーヴィンを弁護している。それは何故だろうか。マーヴィン・メーシーは“one of seven unwanted children” である。メーシー家の子どもたちは親からは常に冷たい目で見られ、殴られ、見捨てられ、行方不明になったり、虚弱なために死んだりしている。だが、マーヴィン・メーシーとヘンリー・メーシーは町のメアリー・ヘイル夫人の家庭に引き取られ、愛情に包まれて育てられる。しかし語り手は子どもの心について次のようにいう。“But the hearts of small children are delicate organs. A cruel beginning in this world can twist them into curious shapes. The heart of a hurt child can shrink so that forever afterward it is hard and pitted as the seed of a peach.” (36)

養母から同じ愛情を注がれながらも、マーヴィンは幼い頃の悲惨な環境の影響から抜け出せず、性格は捻じ曲がっている。しかし弟のヘンリーは同じ生い立ちでありながらマーヴィンの性格と正反対である。彼は“the kindest and gentlest man in town” (36) である。彼は不幸な人を助け、弱い子どもの面倒をみる。同じ境遇の中で、メーシー兄弟は一方は善への道を、もう一方は悪への道を選ぶことになる。作者はメーシー兄弟を比較し、両親との関係、そしてその後の生活環境を描写することで、巧妙に読者に人生の明暗を分ける「運命の存在」を告げようとしているのではないだろうか。ところが、二十二歳の時にマーヴィンは十九歳のミス・アメリカに愛情を抱き、彼女を結婚相手に選ぶのである。

“That solitary, gangling, queer-eyed girl was the one he longed for. Nor did he want her because of her money, but solely out of love.” (35) しかも彼はアメリカに求婚する二年前には「自分の弟や養育してくれた善良な婦

人に屈辱と災難しかもたらさなかった」(37) 人間である。それがアメリカを恋するようになると、「マーヴィンはがらっと性格が変わり、弟や養母にもやさしくなり、給料を貯め、節約するようになった。」(37) そればかりか、「神にも手を差し伸べ」、礼拝や宗教集会にも出席するようになり、行儀もよくなった。」(37) のである。この愛の奇跡によるマーヴィンの人格的向上は、ライモンに対する愛で生まれ変わったアメリカの場合と同じである。悪党であったマーヴィン・メーシーはアメリカに愛されたいが故に善人へと自己改革を遂げる。マッカラーズは愛の力の大きさを強調するために、マーヴィンの場合も、ライモンへの愛で変貌したアメリカの日常の行動とまさに同じといい表現を与えている。彼はアメリカに求婚し、結婚するのだが、それは誰の目にも “a strange and dangerous marriage” (9) なのである。アメリカの行動は結婚当日から不可思議である。マーヴィンを寄せつけず、何故結婚したのか推し量りがたいものである。結婚式の後の様子を語り手はこう描いている。

In fact, she treated her groom in exactly the same manner she would have used with some customer who had come into the store to buy a pint from her. But so far all had gone decently enough; the town was gratified, as people had seen what his love had done to Marvin Macy and hoped that it might also reform his bride. (38)

アメリカとライモンとの関係は、マーヴィン・メーシーとアメリカの関係の裏返しで、多くの類似点をもつ。例えば、世間常識や理屈では理解できない人目惚れ、運命的な「愛」により相手を選んでいる点、ひたすら選んだ相手に心の底から尽くす点、見るからに不釣り合いな点などである。だがこの不釣り合いな関係こそ、つまり常識を逸脱した「愛」の関係こそがマッカラーズのいわんとする「愛」に対する方程式なのである。そして作者によれば、“... the value and quality of any love is determined solely by the lover himself.” (34) なのである。町の人々は彼女が “a calculable woman” へと変貌することを願うが、それは叶わない。

アメリカの「愛」を得ようとして、全財産、つまり森林地まで譲渡した日、昼から沼地へ行き、酔っ払って夕方帰ったマーヴィンは彼女の肩に手を置き何かいおうとするが、張り飛ばされてしまう。それ以後の彼は酔ったり、アメリカに近づいたりするたびに殴られる。マーヴィンは、アメリカの屋敷の境界の外側に追いつかれたあげく、最後には階下へ降りてくるアメリカを待ったことから、アメリカに家宅侵入罪で訴えられる。その日、マーヴィンは復讐するといった脅し文句入りの“a wild love letter”を書き残して立ち去る。前述したように、結局、アメリカとの結婚生活は十日で終わりを告げる。アメリカに見捨てられたマーヴィンは、本性をむき出しにし、数々の犯罪を犯し、アトランタ近くの刑務所に入る。語り手は町の反応を次のように描いている。

The town laughed a long time over this grotesque affair. But though the outward facts of his love are indeed so sad and ridiculous, it must be remembered that the real story was that which took place in the soul of the lover himself. So who but God can be the final judge of this or any other love? (42)

マーヴィンは「愛」によって一時自己向上を成し遂げたが、「愛」を拒絶され、暴力的な屈辱を喫することで、再び悪人へと転落するのである。作中、語り手は“the true character of Marvin Macy finally revealed itself, once he had freed himself of his love. He became a criminal...” (41) といっているが、マーヴィンの性格が本質的に悪であるかどうかよりも、ここで重要なのは、「愛」によってマーヴィンが一時的にせよ悪の世界から善の世界を求めようになったこと、また彼の「愛」に対する相手の反応によって彼が再び悪の世界へと転落した点である。マッカラーズの意図は、愛の力の不思議さ、また「愛」は人間を善へと導くと同時に、悪へも導く力をもっていること、運命を左右するものでもあることをも示しているといえよう。だがアメリカにとってこの結婚は何であったのか。アメリカとマーヴィンの結婚には、一般的意味での、愛する者同士の精神的、肉体的

結びつきが欠如しているように、アメリカとライモンの「同棲生活」にもこうした結びつきが欠如しているといえる。視点を変えて見るなら、この作中で描かれる「愛」の世界は、「愛する者」の一方的な献身であり、その報酬は愛する“喜び”と苦悩そのものである。

カースン・マッカーズは愛の本質をそのように捕らえている。この物語の主要な登場人物が味わう「愛の喜び」は肉体的な結びつきによる喜びよりも、もっと精神的な、しかも見返りのない、一方的ともいうべき、苦痛を伴うものである。しかし第三者から見れば、この *The Ballad* に描かれる「愛する者」の「愛」はあまりにも「見返りのない」ものということになるだろう。だが、マッカーズは「愛する者」の愛がまったく見返りのないものとは必ずしも考えていない。この作中の「愛する者」は、「愛する相手」が身近にいるという事実そのものに“愛する喜び”を感じている。例えそれが苦悩を伴うものであってもである。しかも作者は「愛する者」と「愛される者」とのこの行き違いの追いかけてこを描く際に、登場人物の行為を極端に誇張して描くことでユーモラスな効果を生み出し、描かれる現実の厳しさを和らげている。

「愛する者」は「愛する相手」の一举一動に「視線」を送り、心を砕き、相手にひたすら尽くすのである。従って愛すれば、愛するほど、「愛する相手」の反応と自己の愛のギャップから必然的に「愛する者」は「孤独」となる。それ故に、語り手は「愛」について次のように定義している。

First of all, love is a joint experience between two persons — but the fact that it is a joint experience does not mean that it is a similar experience to the two people involved. There are the lover and the beloved, but these two come from different countries. Often the beloved is only a stimulus for all the stored-up love which has lain quiet within the lover for a long time hitherto. And somehow every lover knows this. He feels in his soul that his love is a solitary thing. He comes to know a new, strange loneliness and it is this knowledge which makes him suffer. So there is only one thing for the lover to do. He

must house his love within himself as best he can; he must create for himself a whole new inward world — a world intense and strange, complete in himself. (33)

しかもマッカラーズによれば、「愛される者」は「愛する者」を恐れ、憎む。何故ならば、“... the lover is forever trying to strip bare his beloved. The lover craves any possible relation with the beloved, even if this experience can cause him only pain.” (34) からである。

マッカラーズが描くアメリカとマーヴィンとライモンの“三角関係”は一見、奇妙で、滑稽で、スラップスティックの様相を呈しながらも、人間存在の不可思議な深淵を覗かせているのである。無論この物語の主人公アメリカはアリストテレスが『詩学』で述べるギリシア悲劇にあるような高貴な“英雄的”な人間ではないし、同じ意味でマーヴィンもライモンも「すぐれた性格をもつ」人物ではない。しかしアメリカとの関連で愛の問題を提示する役割を担っている視点からは、愛を求める人間の代表として、その姿は高い象徴性を示している。

IV ライモンとマーヴィンの結束

ライモンとの同棲生活の始まりから六年経過した夏のある日、アメリカはヘンリー・メーシーからマーヴィン・メーシーが仮釈放で出所することを知る。秋が過ぎ、冬になり、霜が降りた寒い日、復讐すると言っていたマーヴィンが町に戻る。すると、マーヴィンが戻ったという噂はたちまち町中に広がる。ライモンは酒場の近くでトラックから降りたマーヴィンと最初ににらみ合う。その夕方アメリカが酒場に戻り目にするのは、裏庭にいる町の連中とマーヴィン、それにライモンの姿である。町の連中はアメリカの出現で一騒動起きることを期待している。アメリカがまず注目するのは、マーヴィンの不思議な行動である。アメリカはライモンを「不快そうな驚きの目で」じっと見つめる。ライモンは、マーヴィンに取り入ろうとして耳をびくびくしたり、目蓋をぱちぱちしたりする。苛立った、マー

ヴィンがライモンの頭を叩く。アメリカとマーヴィンとがお互いに憎悪していること、ましてアメリカが他人にはライモンに指一本触れさせないことを考えても、彼女が斧でマーヴィンの頭を叩き割るような血なまぐさい暴力行為に出て当然である。だが何も起こらない。そして物語の語り手は、ミス・アメリカが時折“a sort of trance”状態に陥ることを語る。そしてその原因がアメリカが新薬を自分の体で試すときにこの種のトランス状態になることがあると語ると同時に、マーヴィンとせむし男を見つめるアメリカの表情がまさに「それと同じ表情」であるといっている。何故だろう。薬の作用によってではなく、トランス状態を引き起こすのだが、この場面では彼女がいつもの彼女からは想像できない反応、つまり異常な反応をしている。さらにこの点を追求するならば、そうした状態の原因となるものは何かということである。しかも語り手はライモンがマーヴィンを一目見て以来「怪しい魂」に取りつかれるようになったといい、マーヴィンが魔法でも使わなければ説明できないことだと読者を戸惑わせる。

Now it seemed to the town that he was more dangerous than he had ever been before, as in the penitentiary in Atlanta he must have learned the method of laying charms. Otherwise how could his effect on Cousin Lymon be explained? For since first setting eyes on Marvin Macy the hunchback was possessed by an unnatural spirit. Every minute he wanted to be following along behind this jailbird. (63) (下線部は筆者による)

つまり、マーヴィンが「魔法のかけ方」を学んだのでなければ、ライモンの異常な行動は説明できないというわけである。一目ぼれというものが常識を越えた、または自分自身にもわからない何物かの作用によらしたら、そこには運命的な意味合いがあるのではないだろうか。マーヴィンやアメリカやライモンは自分でもわからない何物かの作用を受けて、世間常識では計り知れない関係をもっていると考えられるのである。このように考えるとき、“a sort of trance”や“an unnatural spirit”といった表現は深い意味を帯びるのである。マーヴィンの関心を引こうとして見せるライモ

ンのパフォーマンスの異常さを見て、マーヴィンは「このちびさんは発作でも起こしたか」というが、これもライモンが何物かに取りつかれた結果の行為である。

血の雨が降っても不思議のないマーヴィン・メシーの刑務所からの帰還とアメリカとの出会い、ライモンのマーヴィンへの異常な偏愛とアメリカに対する侮辱、アメリカの不思議な沈黙と忍従といった経過の中で、マッカラーズは読者に二人の決闘が何時起こるかといった緊張と期待を与えることに成功している。その巧みな技巧の一つは個々の描写の背後にある神秘性の示唆である。この決闘について語る場合でも、アメリカの七という数字への偏愛や人々の迷信や呪いへの関心を語りながら、一つ一つの日常の表面的な事実の背後にある不可解な力、神秘性を暗示する手法を採っている。エリニユスの存在としてアメリカの前に現れたライモンはマーヴィンと“two criminals who recognize each other”のようになる。「予想された通り、マーヴィン・メシーは最初から悪運を」招き、悪の増大の伏線となっている。語り手によれば、マーヴィンの出現は天候の急変、沼地からの悪臭、フォクス・フォールズ街道近くで腐敗した豚肉による死者の発生をもたらす。そして幸福の装いで訪れたライモンが復讐心を抱くマーヴィンと結びつくとき、アメリカをおびやかす明白なエリニユスの存在となる。アメリカはさまざまな策略もちいて、マーヴィンからライモンを取り戻そうとすが、ことごとくが裏目に出る。やがてマーヴィンは養母ミセス・メアリー・ヘイルの家からアメリカの家に移り、寝泊りするようになる。ライモンへの愛情から、アメリカは宿敵をまじえた不思議な共同生活をはじめ。ライモンは自分の部屋のベッドをマーヴィンに譲り、居間のソファで眠る。だが雪が降り、冷え込んだのが原因でライモンが扁桃腺炎にかかる、アメリカはライモンに自分のベッドを明け渡すことになる。やがて雪が解け、アメリカは決闘に備えてトレーニングに励むようになる。

She was brave, she practiced faithfully with her punching bag, and in this case she was clearly in the right. So people had confidence in her,

and they waited. (73)

町の者たちは二人の決闘が何時あるか期待し、酒場はそれを見たい客で繁盛する。“unnatural spirit”に取りつかれたライモンはマーヴィンの気を引くために悪の性質を露わにし、人前で露骨にアメリカの身体的部分や動作をまねて見せるようになる。そのライモンの行為はこのように描かれている。

There was something so terrible about this that even the silliest customers of the cafe, such as Merlie Ryan, did not laugh. (73)

ミス・アメリカはマーヴィンへの憎悪とライモンへの愛との板ばさみになり苦悩を深めるが、ライモンを失うことへの不安から二人の侮蔑にも耐え抜く。*The Ballad* から引用する文章からはアメリカの心境に託した作家マッカラーズの孤独な独白が聞こえてくるようである。

Once you have lived with another, it is a great torture to have to live alone. The silence of a firelit room when suddenly the clock stops ticking, the nervous shadows in an empty house — it is better to take in your mortal enemy than face the terror of living alone. (72)

V 対決と運命

このような周囲の状況の中で酒場はますます繁盛し、ミス・アメリカとマーヴィン・メーシーが拳を固め、ファイティングポーズをとり、互いに睨み合う瞬間(74)が毎晩のクライマックスとなる。この場面は素手で戦った頃のプライズ・ボクサーが戦う前に互いに睨み合い、闘技場内をぐるぐる回りながら士気を高め、攻撃のチャンスを窺う姿を髣髴させる。だが語り手はクライマックスの訪れる瞬間を次のように“mysteriously”という言葉で表現している点に留意したい。“Usually this did not happen after any especial argument, but it seemed to come about mysteriously, by means of some instinct on the part of both of them” (74-75) 「そして夜毎に二人

が闘う姿勢をとる時間は前の晩よりも長くなった。」(75)二人の決戦は二月二日のウッドチャックの日となる。その日“A hawk with a bloody breast”がアメリアの家の辺りを二度旋回する。この「胸を血に染めた鷹」の飛翔も自然界による前触れであるが、それが瑞兆か、凶兆かはデルポイの神託のようにあいまいである。この決闘の当日の描写でも、“This was known to everyone, not by announcement or words, but understood in the unquestioning way that rain is understood, or an evil odor from the swamp.”(77)と人々の行動の共時的な反応を語ったり、“all who love mystery and charms”について触れながら、“mystery”や“charms”という言葉によって読者の心に“mystery”の存在を意識させようとしているように思われる。七時丁度にアメリアが階段の上に姿を見せると同時に、マーヴィンも酒場の前に姿を見せる。

ここで注目したいのは、決闘する二人の登場の仕方である。語り手がこの決闘について“*It must have been arranged in some manner beforehand.*”(78)というように、二人は申し合わせたように登場する。しかも二人の目は“*like the eyes of dreamers*”である。決闘にまさに臨む者ならば、ましてや長い間の憎悪に決着をつける瞬間を今迎えている者ならば、闘志と憎悪を剥き出しにし、目をざらざら光らせていて当然である。だが語り手はアメリアとマーヴィンが「夢見る者のような目」をしていると語るのである。闘志を漲らす者の描写としては、まったく“不自然”といえるが、この決闘する者たちの目の表現に見られるこの不自然さ、この“*the eyes of dreamers*”という言葉にこそ作者の深い意図が示されているのではないだろうか。つまり、この二人の決闘も時期も何物かによって、あるいは大きな人知を超える、超自然的な力によって予め仕組まれていたということであり、それゆえに、仕組まれた当日が来ると、この両者は拳こそ握り締めてはいるが、目に見えぬ何らかの力に操られ「夢見る者のような目」をして、決闘に臨むのであると考えたい。

大女で、腕っ節が強く、トレーニングに励んできた彼女とマーヴィンと

の間で激しい殴り合い、取っ組み合いが行われる。それは“a struggle with overtones of the Grendel-Beowulf encounter”¹⁰⁾である。町の者たちの期待通り、やがてアメリカがマーヴィンの喉もとを掴み、勝負がついたと思えた瞬間、ライモンが「まるで鷹の翼でも生えたように空中を飛んで」彼女に襲いかかる。そして勝負はアメリカの敗北という意外な結末を迎える。ここにはギリシア悲劇におけるペリペティア(逆転変)の形式の模倣があるのでなかろうか。

マーヴィンとライモンはアメリカの貴重品を奪い、自動ピアノを破壊し、台所の床にシロップを撒き散らすなどして立ち去る。愛するライモンに裏切られ、決闘に負けたアメリカはすっかり人間が変わる。彼女の善良な部分は影を潜め、別人格になる。ライモンを待ち続けたアメリカはそれから四年目に家を板で囲んでしまう。愛の喪失と裏切りによってアメリカは生き甲斐を失い、廃人となるのである。ギリシア悲劇的構成で考えるならば、男性優位社会において町を支配する力を発揮するアメリカの“男性的”活躍は、モイラ(己に与えられた運命)を越えたヒュブリス(越権行為)となり、エリニュスのライモンによって最後には罰せられ、社会の秩序が回復されるという結末である。そして社会秩序の姿を再確認するようにこの物語の終章において“chain gang”がコロスの役割を担って再登場している。これは男性優位社会の象徴であり、異端的アメリカを封じ込めた社会の姿でもある。マッカーズがこうした社会を批判していることはいうまでもない。

IV 一目惚れの構造の意味するもの

マッカーズがこの *The Ballad* で人間の愛と孤独を描いているという点は大方向の評であり、それに異論はないが三章で考察した語り手によりしばしば暗示される“mystery”に関する言及や“the eyes of dreamers”という

10) Margaret B. McDowell, *Carson McCullers*, p. 69.

決闘する者の目の描写に見られる不自然さの意味と関連し、この章では再度ここで「愛する者」と「愛される者」の三角関係の図式に見られる特質を考えてみたい。換言すれば、アメリカやマーヴィンやライモンの滑稽な追いかけっこの愛の図式にある異常さは何処から生ずるのかということである。世間常識から見ると、アメリカもマーヴィンもライモンも愛の対象、結婚の対象として何故もっと自分を理解する相手を選ばなかったのかということである。彼らに他の選択肢があったなら、彼らは少なくとももっと幸福になれたはずである。だが彼らにはその自由が与えられていない。それはマッカラズがこの特異な追いかけっこの図式を成立させるために“一目惚れ”という愛情形式を用いているからである。この“一目惚れ”を三角関係の基盤とすることで、作者はアメリカやマーヴィンやライモンの常軌を逸した、理不尽な行動に説得力をもたせる工夫をしているのである。この理不尽な行動に走らせる“一目惚れ”の意味するところの背後にあるものを考えるならば、そこにはギリシア悲劇に見るような、運命の力の介在が感得されるのではないだろうか。その運命の介在を示す“一目惚れ”とは何かということになる。ドニ・ド・ルージュモンの『愛について』の〈一目惚れ〉と回心の項にある詩の一部を引用して定義すれば、次のようになる。

彼の人間全体が一変した。/ 彼は別人のようになった。/ 彼のすることすべては / 狂気にまつわられている如く / 無分別になっていた。/ 彼の感覚は乱れ / 愛に迷わされて、/ 自然のくびきから / 解放された観があった。¹¹⁾

“一目惚れ”に陥る三人の登場人物のそれぞれ好きな相手に対する献身ぶりは常軌を逸したものであり、その相手との精神的な不一致は時には耐えがたいものであり、その相手の仕打ちは「愛する者」にとって絶望的ですからある。しかし、マッカラズの描くこのグロテスクさには笑い飛ばせな

11) ドニ・ド・ルージュモン『愛について——エロスとアガペー——』鈴木健郎・川村克巳訳(東京:岩波書店) pp. 484-485.

いものがある。何故ならば、作者はこの“一目惚れ”の牽引力によって、この作品において「愛する者」がその愛の対象となる相手からたとえどんな仕打ちをされても、愛さずにはいらぬ姿を執拗に追求しているからである。それはとりもなおさず、理非を超えた世界であり、これらの登場人物が何らかの必然性、自分の意志ではどうにもならぬ力に突き動かされているということになる。その意味において一目惚れは、この作品においては己自身の力ではどうすることもできない運命の力を表しているといえよう。Carr は *The Lonely Hunter* の中でマッカラーズの神についての考えを次のように書いている。

Although deeply religious in a natural sense, Carson had accepted since age fourteen the fact that her Christian beliefs must, of necessity, be divorced from church or dogma. She recognized God as an omniscient being, a supreme creator who imposed order on the universe but she sometimes saw Him as a capricious deity whose specialty was freaks.¹²⁾
(下線部筆者による)

マッカラーズにとって神は時に気まぐれであり、その神によって与えられた運命をアメリカもライモンもマーヴィンも生きなければならない。それが作中三角関係を織りなす人間たちの置かれたこの世の中での極限的状況であり、作者はそれが彼らに与えられた運命であると主張しているように思われる。この状況はとりもなおさず自然の中で翻弄される人間のよるべない姿を示しているといえる。*The Ballad* はギリシア悲劇のような壮大な“悲劇”ではないが、社会と個人、愛と宿命に対する問題を提起している作品である。この作品には、Reeves との離婚訴訟とそれから生ずるさまざまな葛藤に悩み、David Diamond と Reeves と自分自身との複雑な愛情関係に翻弄され、病苦にも苦しみ、神を求めながらも、求めきれず時には折ることすらできず、それでもまた時には神を求めずにはいられなかった *The*

12) Virginia Spencer Carr, *The Lonely Hunter: A Biography of Carson McCullers* (New York: Carroll & Graf Publishers, inc., 1975) p. 194.

Ballad 創作当時のマッカラーズの凝視した孤独と孤立の人生観が反映されているといえる。¹³⁾

13) マッカラーズの *The Ballad* 創作当時の状況については Carr が *The Lonely Hunter* 六章 “New York City and Yaddo, 1941”、七章 “Columbus and Yaddo, Fall 1941 — Winter 1942” それに八章 “Reconciliation and Remarriage: Columbus and Nyack, 1943—45” で詳述している。Margaret B. McDowell は *Carson McCullers* (Boston: Twayne Publishers, 1980) pp. 65–66 でマッカラーズの愛情問題について触れている。